

ひかりのこ

7月園便り

聖ミカエル幼稚園

2014年6月24日

『学ぶこと』

聖ミカエル幼稚園の先生たちは、本当にまじめで勉強家そろいです。私の園の運営方針としても、機会と意欲があれば、先生たちにはどんどん外に出て学んでほしいと考えています。それがいつか子ども達へ必ず還元されるだろうと考えるからです。

5月にはご存知のように、今城先生が新潟で「子供の体力向上指導者養成研修」に参加してきました。昨年度のおゆうぎ会のばんだ組の発表に取り組むうちに、子ども達の「体力向上」が他の保育の場面でも良い影響を与えると感じ、「もっと勉強したい」と考えたそうです。この研修会は文科省が主催し、北海道の代表としての研修でしたので、集まった先生方は教育委員会の指導主事の方や幼小中高の中心的な先生方がほとんどでした。その中で今城先生は朝から夕方まで4日間の質の高い研修を受けてきました。

8月には植木先生がこれも文科省主催の特別支援の研修会のため、横須賀に飛びます。

また、聖ミカエル幼稚園では研修に参加した後は、レポートの提出と園内研修会で発表することを義務付けていますが、この内容もとても濃いものになっています。昨年度の冬休みに佐賀県へ研修に行った植木先生はその研修内容をパワーポイントにまとめ、全道の聖公会の園長チャプレン会と園内研修会で発表しました。

研修に参加した先生たちは、たった2時間の研修に参加した時も、A4の提出用紙に小さな字で、空白がないくらいびっしり研修内容や考察をまとめてきます。それは正職の先生だけでなく、補助の先生たちもみんなです。お子さんがまだ小学生である補助の先生たちも、夕方の研修に積極的に参加します。本当に頭が下がります。

先生たちのこの「学びたい」という意欲を支えるのは、なんととっても毎日顔を合わす子ども達への「愛情」です。今、目の前にいる子ども達にも、もっと良い保育をしたい、そのためにはまず自分自身を高めたい、という強い「意欲」があるからこそ、自分のプライベートな時間を割いてまで「学ぶ」のです。この雰囲気こそが現在の聖ミカエル幼稚園の安定感や安心感につながっているのだろう、と私は感じます。

園長の私も負けてはいられません。学生時代に専攻した発達心理学をもう一度学び直したい、と考えています。また、できれば保育に関連する資格もキャリアアップしていきたいと考えています。時間があれば、いろいろ勉強したいことはたくさんあります。

人間、一生勉強です。

園長 渡部良子

月主題：やってみる

・暑さに留意し、夏の生活を送る

・夏の自然に触れ、様々な活動に取り組む

・自然事象や健康管理、防災に関心を持つ

キリスト教保育

20代の一時期、道北の名寄に住んでいました。そこで心の病いで長期入院された方々の退院後の社会復帰を支援する仕事に係わっていました。まったくの門外漢でしたので、最初は目にするもの聞くものすべてが驚きでした。共同作業所では真冬にカチカチに凍った蜂蜜を解かして瓶詰めをしたり、夏は炎天下の畑で農作業を共にしました。回復者の方々の健康状態を見ながらの作業は、決して楽ではありませんでした。しかしここで私は、常識とは何か、人間の幸せとは何かということについて、ずいぶん考えを新たにされました。また、回復者の方々が再発と偏見に苦しめられながら、たくましく人生を楽しもうとする姿を目にしました。そのような出会いが牧師を志す動機の一つになっています。

同じ頃、日高の浦河町で、やはり心の病いを持つ人々が共に生き、支え合う「ベてるの家」が活動を始めていました。ベてるは、現在では「当事者研究」などで大きな成果を上げ、日本の精神医療に大きな影響を与え、テレビや雑誌などにも取り上げられています。

ベてるが発信しているメールマガジンのタイトルは、『ホップ・ステップ・ダウン』といます。ベてるらしいユーモアのある表現ですが、ここには日々の悲喜こもごもが表現されています。順調にホップ、ステップしていき、しかし、ここぞという時にダウンすることがある。ダウンとは通常、失敗であり中断なのですが、ベてるではそう考えず、ダウンすることもまた、「順調さ」の一つなのだということです。聖書にある「わたしたちは弱い時にこそ、強い」という言葉を思い出します。

幼稚園でも、こどもたちも大人も、ホップ・ステップ・ジャンプが望ましい。しかし、ダウンすることだってあるものです。ダウンすることは深刻な打撃ではなく、もっと高いところに到達するための備えの時なのかもしれません。私たちの失敗や中断の経験を大切にできる幼稚園でありたいと思います。

チャプレン 司祭 下澤 昌